

65 リハビリテーション病棟に入院した高次脳機能障害患者の復職への思い

病院 看護部 4階東病棟 山下昌彦 赤川詠子 篠崎菜穂子

【はじめに】高次脳機能障害患者は身体機能が復職可能な状態になっても、就労に困難をきたすことが多い。高次脳機能障害患者の復職への思いを明らかにすることで、復職を視野に入れた看護師の支援のあり方について示唆を得たいと考えた。

【研究目的】リハビリテーション病棟に入院した高次脳機能障害患者が復職に対してどのような思いがあるのかを明らかにする。

【研究方法】研究対象者：入院時に高次脳機能障害と判断され、入院面談時に復職希望があり、本人・家族から同意を得た患者2名。データ収集方法：インタビューガイドを用いて約30分間の半構成的面接をA氏・B氏に各々2回行った。分析方法：インタビュー内容を逐語録化・コード化し類似性により分類し、カテゴリを形成した。

【倫理的配慮】当センターの倫理審査委員会の承認を得た。本人・家族に書面と口頭で研究の趣旨、匿名性の確保、研究参加は自由意志による事等を説明し同意を得た。

【結果】〈病気による身体的変化〉〈高次脳機能障害への気付き〉〈復職への焦り〉〈職場のサポートの必要性〉〈働き方の見直し〉の5つのカテゴリが生成された。A氏は、〈病気による身体的変化〉を感じず、〈高次脳機能障害への気付き〉がない。そのため、〈職場のサポートの必要性〉を感じていない。〈復職への焦り〉を感じており、1回目より2回目の退院後のインタビューにおいて〈復職への焦り〉に関する発言が増加していた。B氏は、〈病気による身体的変化〉を感じ、〈高次脳機能障害への気付き〉もある。そのため、〈職場のサポートの必要性〉を感じている。〈復職への焦り〉を感じているが、1回目より2回目のインタビューにおいて〈復職への焦り〉に関する発言が減少していた。両者とも復職後の〈働き方の見直し〉を考えていた。

【考察】自己認識のモデルとして、Crossonらのモデルがある¹⁾。A氏の障害の認識は、特定の機能が障害されたことを知る能力である「知的気付き」の前段階と低いレベルにあり、B氏の障害の認識は、実際に問題が起きている時に問題を認識する能力である「体験的気付き」の段階であると考えられる。高次脳機能障害への気付きには段階があり、それらが復職への焦りや職場のサポートの必要性の感じ方に影響していると考えられる。そのため、高次脳機能障害への気付きの段階を高める支援が必要となる。同時に、気付きの段階によって異なる心理的ストレスに配慮して関わることも重要となる。

【結論】高次脳機能障害患者の復職への思いについて、〈病気による身体的変化〉〈高次脳機能障害への気付き〉により、〈復職への焦り〉〈職場のサポートの必要性〉の感じ方に違いが見られた。

【引用文献】

1) Crosson B, et al: Awareness and compensation in post acute head injury rehabilitation, Journal of Head Trauma Rehabil, 4, 46-54, 1989